

英語学力評価・測定の史的研究

—昭和前期(1920～1950年)—

兵庫教育大学

萬 谷 隆 一

0 はじめに

英語科の評価・測定の歴史は、明らかにされていない部分が多く、その史的な流れを体系的に扱った文献も極めて少ない。本研究は、日本の英語教育における評価・測定の歴史を明らかにする初歩的な試みである。

本研究では、大正10年頃から太平洋戦争終結の頃までを一区切として、この時代に起きた客観テストの普及を扱う。英語科の評価・測定の歴史のなかで、客観テストの普及は最も重要な変革の一つであった。わが国の英語教育において、客観テストがいかに普及するに至ったか、以下で明らかにしていきたい。

1 歴史的位置づけ

英語科の評価・測定における客観化の歴史的展開を考える前に、まず外国語テスト全体の歴史的な流れをふまえる必要がある。言語テストを客観化しようとする動きが起った前後では、言語テストについてどのような考え方が主流を占めていたか、または占めているかをふまえることにより、このテスト客観化の時代が歴史的にどのような役割を果たしたのかをより明確に知ることができる。

欧米における言語テストの歴史を Spolsky (1978: v-x) は、3つに区分して考えている。彼の説明を簡単にまとめてみると次のようになる。

- I. Pre-scientific period
- II. Psychometric-structuralist trend
 - 1) Educational Measurement
 - 2) Structural Linguistics
- III. Integrative-sociolinguistic trend
 - a) Language Competence trend
 - b) Communicative Competence trend

(Spolsky 1978: v-x)

図1 言語テストの歴史における3つの流れ

ここに挙げられている I, II, III, の歴史的な区分は、大体この順に現れたと考えて良いであろうが、Spolsky によると、必ずしもそれぞれがひとつの時期を画しているわけではなく、時間的にも内容的にも重複している。特に II と III は、拮抗しながら共存しているという。

I の pre-scientific period においては、テストの信頼性や妥当性などは度外視され、とにかく教師は主観に頼ってさえいれば、テストできるものと考えられていた。

第二の流れである psychometric - structuralist trend では、心理測定学や構造主義言語学の影響を受け、前時代の主観テストの欠点を克服するために、客観的で信頼性の高いテストが追求された。この第二の時期を Spolsky は、2段階に分けて考えている。まず第1段階は、心理・教育測定の動きを反映したテストの客観化の段階である。第2段階では、客観的なテスト方法を用いるというだけでなく、構造言語学を言語テストに応用し、どのような言語項目をテストすべきかが、Lado らを中心に盛んに研究された。第IIの流れは二分されてはいるが、客観性を重視する心理測定のテスト観と、より分析的に言語能力をテストしようとする構造主義言語学のテスト観が巧みに調和していると言えるであろう。テストを独自の研究領域として把え、料学性を導入した点で、IIの時期は重要である。

第IIIの Integrative - sociolinguistic trend は、言語を要素別にテストしようとする第IIの流れに対する反動として出てきたもので、その名が示すとおり、2つの考え方が复合している。一つは、言語能力をテストするためには個人が持つ言語能力全体をフルに稼働させるような統合的テストを用いなくてはならないとする考え方である。もう一つは、言語能力を特定の場面で「適切な」言語を用いて伝達できることとする、社会言語学の影響を受けた考え方である。

アメリカでは、IIにおける1)の動き、つまりテスト客観化の動きは、1920～30年代に盛んになり、2)のLadoらによる構造言語学の応用が盛んになったのは、大体1950～60年代である。IIIのa)のLanguage Competenceの流れは、Carroll(1961)を端緒として広がったものであり、b)のCommunicative Competenceの流れは、1960年代より顕著となってきた。

日本の英語教育における測定・評価の歴史についても、Spolskyの枠組をあてはめることができる。IのPre-scientific periodは、おおよそ明治、大正期から昭和期まで続いていると考えられ、IIの1)の教育測定の動きは、昭和初期(1920年代中ば)に目芽え、その後1930年代にかけて盛んになり戦後まで尾を引いた。さらに、IIの2)のLadoらによる構造言語学、対照言語学の言語テストへの応用は、1960年代に開花した。IIIの流れは、わが国において次第に広く知られ認められてきてはいるが、今だその考え方が広く実践される段階には至っていないと思われる。わが国においても、以上の3つの流れまたは時期が明確な時代区分をもつわけではないことに注意すべきである。それぞれが発生した時期は異なっているけれども、時間的には互いに重複し併存していた、または併存していると考えられるべきであろう。

2 英語科におけるテスト客観化の試み

昭和のはじめ、またはそれ以前では、英語科の考查方法は、永原(1932:345)が述べるように、入学試験をみる限りでは英文和訳、和文英訳が大勢を占めていた¹⁾。しかし昭和のはじめから昭和12～13年の日中戦争の頃まで、活発に客観テスト(当時はNew-Type Examinationsと呼ばれていた)の使用が主張された。その中心となって活動したのは、H. E. Palmerと英語教授研究所(現在の語学教育研究所)である。

a) H.E. Palmer

E.L. Thorndikeの『精神的社会的測定学入門』が、1903年に、そしてA. Binetの知能検査は、1905年に発表されている。こうした測定の動きは、教育全体にも波及し、1910～20年代にかけて頂点に達した。

Palmerは、いち早く当時の測定運動に注目し、そのテスト方法を外国語テストに応用する可能性を論じた。この意味において、Palmerは日本語の英語教育に客観テストを導入した先駆者であると言える。

まず Palmer は 1924 年（大正 13 年）に、*Memorandum on the Problem of English Teaching in the Light of a New Theory (Appendix A)* を発表し（市河監 1962：354 - 357），知能テストの手法を外国語テストに応用するにあたって，直接的な応用はできないことを強調し，外国語テストに特有な問題として，外国語テストが「何をテストするのか」を考える必要を説いている。また 1927 年（昭和 2 年）には“The New-Type Examinations”というパンフレットを発表し，反響を呼んだ。この中で Palmer は，再び知能テストの手法を応用するに際しての注意を述べた後に，当時の教育測定運動によってもたらされたテストの改革点を，New-Type Test の研究者として有名な B. D. Wood の著書に従い，10 点挙げている。

テストの作成と使用に際して，まず以下の 6 点が重要である。1) 使用尺度の性質を認識すること，2) テストする能力を定義し分類すること，3) 適切な難易度を設定すること，4) 目的によってテストする能力の相対的重みづけを変えること，5) 適切なテストを用い，学習の促信に役立てること，6) テスト実施前に問題の例示，練習を行うこと。さらに客観テストによる改革点として以下の 4 点を挙げている。7) テストの解答用紙の規格が一定であり採点が極めて楽である，8) 短時間で目的とする能力が測れる，9) 広範囲から多数のサンプルを抽出できる，10) かな配点が可能である。他にも Palmer は，英語教授研究所発行の機関誌 *The Bulletin* の主幹として，客観テストの使用を主張する論考を多く発表し，その後の同誌上における客観テストについての盛んな論議の口火を切った (Palmer 1925, 1931, 1933)。

このように Palmer はいちはやく，旧態依然として使われていた英文和訳などの伝統的なテスト方法の問題点を克服するためには，客観テストが極めて有効であることを主張し，その普及に努めた点で注目に値する。

さらに Palmer のもう一つの功績は，上記の論考 (Palmer 1927) において，27 の英語学力構成要素を提案したことである。Palmer は，測定形式を決定する前に，外国語テスト独自の問題として学力の構成要素を明確にする必要があることを十分に認識していた。それは学力内容が決定されて，はじめてどのような測定形式が適切か決定することができるからである。彼が提案する 27 の学力構成要素は，1) 個々の音の認知，2) 個々の音の発音，3) 抑揚によって表わされる意味の認知，4) 語の発音，5) 聞いた語の綴りがわかること，6) 聞いた語の意味が了解できること，7) モデルに従い発音できること，8) 発音記号で表わされた語を発音できること，9) 普通文字で書かれた語を発音できること，10) 語が綴れること，11) 書かれた語の意味や含意を理解すること，12) わかりやすく，美しい字が書けること，13) 語の発音を発音記号で書き表わせること，14) 文章を発音記号で表記できること，15) 英文の抑揚を表記できること，16) 発音記号で書かれた文章を音読できること，17) 普通文字で書かれた文章を音読できること，18) 散文を理解できること，19) 散文を和訳できること，20) 会話の英語を理解できること，21) 会話の英語が使えること，22) 英文が言われたとき，または音読されたときに理解できること，23) 英作文ができること，24) 和文英訳ができること，25) 音声学理論を理解すること，26) 抑揚の理論を理解すること，27) 英文法理論を理解すること，である。

これらの中には，永原 (1932) が指摘するように当時の日本の実状に必ずしも適合しないものもあった（例えば 13, 14, 16 など）。また各要素間の相対的重要度も，また各項目がいかなる測定形式で測定されるべきかも，示されていない。しかしながら，この時期においては，これだけ詳細な分析は他に例をみない。こうした学力構成要素をはやくから提案していた Palmer は，極めて先見的であったと言えるであろう。

b) 英語教授研究所を中心としたテスト改善の試み

英語教授研究所は、Palmer を中心として客観テストを一般に普及させるために、年次大会や *The Bulletin* 誌などの出版物を通して、客観テストの実際の問題例を盛んに紹介した。*The Bulletin* 誌だけを見ても、石川林四郎による客観テスト方式を用いた中学校教員試験問題集(1929)、自由学園の入学試験問題集(1932)、青木常雄らによる客観テストの問題集(1936)など数多く掲載されている。特に重要なものは、A. S. Hornby が英語教授研究所第13回大会(1936)に発表した“Specimens of New-Type Tests”である。この中には、真偽法、多肢選択法、完成法など、新形式テストの問題例が数多く示されている(市河 1962:245-57)。このように英語教授研究所は、客観テストの普及において、重要な役割を果たした。

3 客観テストの普及度

以上のように、昭和のはじめから Palmer や英語教授研究所が中心となって客観テストを普及させる努力が続けられたが、客観テストはいつ頃から教室で評価用具として普及するようになったのであろうか。間接的ではあるが、そのひとつの手がかりとして、戦前から戦後の高等学校、専門学校、高等師範、大学予科の入学試験における、主観テスト/客観テストの割合の変化を年代ごとに追ってみることにする。

調査対象としたのは、昭和8年度、12年度、14年度、17年度、22年度の入学試験問題である。これらは大部分入学試験問題集を参考にした。問題形式の分類は、五島(1950)に従い次のようにした。

主観テスト……英文和訳、和文英訳、自由英作文、要約、文法説明、再構成(reproduction) 問答。

客観テスト……選択、訂正、例示、完成、語形成、転換、書取、問答。

2分類の規準は、採点の際の客観性に依っている。ただここで注意すべきことは、主観テスト客観テストの区分は明確ではなく、両者はむしろ一つの連続線上の両極を成していると考えた方がよいということである。

調査結果は表1に示してある。年代ごとに学校数、問題数にバラつきがあるので単純な比較はできないが、それでもこの表から大体の傾向は読み取ることができる。

表1 年代別にみた主観テスト-客観テストの割合

	昭和8年	昭和12年	昭和14年	昭和17年	昭和22年
主観テスト	558〔92%〕	161〔98%〕	135〔94%〕	254〔91%〕	250〔70%〕
客観テスト	46〔8%〕	3〔2%〕	8〔6%〕	24〔9%〕	106〔30%〕
学校数	100	31	27	56	90
問題数	604	164	143	278	356

この表は、明らかに2つの事実を示している。一つは、昭和17年以前のデータで主観テストが一貫して90%以上を占めている点である。また、その内容を具体的に調べたところ、英文和訳、和文英訳が大部分を占めていた。二つ目は、昭和17年から22年の間に主観テストと客観テストの割合が大きく変化しており、10%以下であった客観テストが30%にまで飛躍的に増加している点である。

昭和17年までのデータから、戦前の入学試験では、ほぼ9割以上が主観テスト、それも大部分が英文和訳もしくは和文英訳に占められていたとすることができる。この点は伊村(1972:719)、永原(1932:345, 1936:31)、松岡(1932:323-5)らの観察と一致する。断言することはできないが、入学試験がこのような状態にあれば、中学校の実際の教室における評価も、恐らくこれに近いものであったと推測できる。それは上級学校の入学試験の問題形式は、言うまでもなく、教室での評価方法に対し極めて強い影響力を持つからである。

上述のように特に戦前までは盛んに客観テストの使用が提唱された。それにもかかわらず、なぜこのように客観テストがなかなか定着せず、相変わらず翻訳問題が主流であったのであろうか。その理由はいくつか考えられる。

第一に英文和訳・和文英訳は、客観テストに比して、問題作成が容易である。客観テストの作成にあたっては、作成者がテストしようとする対象を分析的に把握しておく必要がある。すなわち、まず言語能力を支える個々の項目を明確に意識していなければならない。さらに客観テストの問題作成には、さまざまな工夫——例えば複数の選択肢を作るなど——が必要となり、英文和訳問題などよりはるかに手間がかかる。

第二に、特に英文和訳は、戦前の英語教育において重視されてきた「読み」をテストするのに都合が良かった。もちろん読み以外の三技能が軽視されてきたわけではなく、また読みがどの程度重要なものであったかも、時代により変動があるであろう。しかし、一般に教室では訳読式の授業が多く、英文を「読むこと」、が重要な学力として扱われていた。そして、この学力は「訳せること」と殆んど同義に考えられる傾向があったことは否定できないであろう。こうした学力を評価するには、やはり英文和訳が最適であった。

第三に、入学試験および試験一般において、特に戦前は、テストによって順序づけあるいは及落の判定さえつけばよく、細かな点数の差異が具体的にどのような能力の差異を表わしているかを、問題にするようなことは少なかった。

さて、次に、表1から明らかのように、戦後急激に客観テストが一般に普及したが、これはどのような理由によるのであろうか。いくつかの要因が絡んでいると思われる。

- a) 戦争終結直後、昭和21年にアメリカの教育使節団が来日し、教育測定の方法をより客観化するよう指導した(田中1958:320~1)。
- b) 昭和22年『学習指導要領 英語編(試案)』には、特に考査の問題が取り上げられ、極めて分析的な評価項目が示されている。その中には、客観テストで評価することが適切な項目が多い(大村他編1980第1巻:178-80)。
- c) 文部省の戦中・戦後の教科書(『英語1中学校用』昭和19年、『Let's Learn English』昭和22年など)に、Exerciseとして客観テスト形式が使われている²⁾。これも客観テストを普及させる一因となったと思われる(五島1950:21)。

4 考 察

昭和初期の英語科のテスト方法における最大の変化は、客観化が叫ばれるようになったことである。このことは、伝統的なテスト方法の信頼性の低さを克服するという意味では、大きな進歩であったと言える。しかしその反面、そうした客観テストで「何を測るべきか」についての論議が少なかった。もちろん、上述したように、Palmerは当初よりwhat-to-testについて提案しているし、永原(1932)もこの点について早くから考察を加えていた。しかし、残念ながらこうした試みも一般に顧みられず、むしろ測定形式に関する論議や問題例の紹介が先走りしたようで

ある。まず目標となる学力構成要素を明確にすることが先決で、その後に初めて個々の要素に適切な測定形式を考えるべきであるという主張が聞かれるようになったのは、戦後になってからである（石橋1948, 五島1950, 渡辺1950, 西谷1962）。また、客観テストをこのような学力構成要素との関連において考え、客観テストにも測りやすい学力の側面と測りにくい側面があるということが明確に認識されるようになったのも、永原(1932)を除いて、多くは戦後になってからのことである（渡辺1955, 斎藤1955）。こうしてみると、英語科の評価・測定の歴史的流れにおいて、戦前の昭和期はまず how-to-test に目が向けられた時代であり、その前提となる what-to-test が明確に意識されず、また what-to-test に how-to-test がいかに対応すべきかも充分考慮されていなかった時代であった、とすることができるであろう。こうした点が厳密に考察されるようになったのは、Lado が登場する戦後の昭和期になってからのことである。

5 まとめと今後の課題

本研究においては、昭和初期において、いかに客観テストが日本の英語教育に導入されたかを概観し、そこにおいて特に H. E. Palmer と英語教授研究所がどのような役割を果たしたかを明らかにした。さらに、こうした努力にもかかわらず、客観テストが一般に普及し出したのは戦後になってからであることを、入学試験問題のデータに基づいて、明らかにした。そして昭和前期において、どのような学力項目を評価すべきかについて十分に検討されないままに、測定形式についての論議だけ先行したことを指摘した。

本研究は、英語科における評価・測定の歴史の一部を明らかにしたに過ぎず、今後研究すべき課題は多く残されている。例えば、実際の教室では客観テストが評価用具としていかに使われていたかについての直接的な資料を収集すること、評価において四技能それぞれの相対的重要度が時代と共にいかに変化してきたか、評価方法がそれぞれの時代の教育目標や教授法にいかに関わって展開してきたか、なども重要な研究課題となろう。

稿を終るにあたって、資料収集に際し快く協力して下さいました語学教育研究所の方々、上原すみ子氏に、旺文社書籍局の新井朝夫氏、また、貴重な助言をして下さった広島大学の松村幹男先生、香川大学の竹中龍範先生に、心から謝意を述べたい。

「註」

注1 しかし、昭和以前に客観テストが全く使われなかったわけではない。例えば神田乃武の文法書（昭和37年、1904年）には、完成法、訂正法などの客観式の練習問題が使われている（Kanda 1904）。

注2 終戦直後に文部省が出した『Let's Learn English』（昭和22年）の Book Two にある Robin son Crusoe の話には、次のような Exercise がつけられている。

Fill the blanks: -

- | | |
|---|---|
| 1. He swam as () as he could. | 4. Near his house he saved the life of a native, () was named Friday and () served Crusoe () a faithful servant. |
| 2. By () by he found that he was () a small island. | 5. He lived a simple () on this island () more than twenty years. |
| 3. First () all he had () build a house. | |

(大村他編1980, 第三卷 pp. 213-4)

References

- Carroll, J.B. (1961) "Fundamental Considerations in Testing for English Language Proficiency of Foreign Students" in Center for Applied Linguistics, *Testing the English Proficiency of Foreign Students*. Wash., D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 30-40.
- The Institute for Research in English Teaching (1936) "The Thirteenth Annual Convention" *BL** 128-11.
- Ishikawa, R. (1929) "Examination Papers" *BL* 57-8, 9.
- Jiyu Gakuen College (1932) "Entrance Examination" *BL* 84-5.
- Kanda, N. (1904) *Higher English Grammar* Revised ed. Sanseido.
- Palmer, H. E. (1924) "Memorandum of English-teaching in view of New Theory" Appendix A. in 市河(監) (1962), pp. 354-357.
- _____ (1925) "Concerning Examinations" Editorial, *BL* 16-7.
- _____ (1927) "The New-Type Examinations", A Pamphlet, The Institute for Research in English Teaching.
- _____ (1931) "The New-Type Examination" Editorial, *BL* 70-1.
- _____ (1933) "Examination Reform" Editorial, *BL* 93-4.
- Spolsky, B. (1978) "Introduction: Linguists and Language Testers" in B. Spolsky (ed.) *Papers in Applied Linguistics: Advances in Language Testing Series 2, Approaches to Language Testing*. Arlington, VA: Center for Applied Linguistics, pp. v-x.
- Wood, B. D. (1928) *New York Experiments with New-Type Modern Language Tests*, N. Y. : Macmillan.
- _____ (1934) "The Reliability of the New-Type Examination" in N. Naganuma (ed.) *A Commemorative Volume*, The Institute for Research in English Teaching, pp. 197-9.
- 青木常雄・村岡博・藪下正太郎(1937~6) 「考査問題集」*BL** 129-11, 130-12, 131-2, 昭和11年
- 石橋幸太郎(1948) 「英語教授法大意」市河(主幹), pp. 69-197
- 市河三喜(主幹)(1948) 『新英語教育講座』第1巻, 研究社, 昭和25年
- _____ (監)(1962) 『英語教授法事典』, 開拓社, 昭和37年
- 池田 央(1978) 「テストの歴史」井上健治(編) 『テストの話』, 中公新書, 昭和53年
- 伊村元道(1972) 「英語力の測定と評価」 『教育心理』vol.20, Sept., 昭和47年
- 英語教授研究所(1936) 「第13回大会雑記」*BL* 128-11 昭和11年
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓(編)(1980) 『英語教育史資料』 (第一巻, 英語教育課程の変遷), 東京法令, 昭和55年
- _____ (編)(1980) 『英語教育史資料』 (第三巻, 英語教科書の変遷), 東京法令, 昭和55年
- 語学教育研究所(1946) 『外国語教授法』, 開拓社 昭和21年
- 五島忠久(1950) 「英語学力測定の方法と問題の形式」 *BL* 209-5, pp. 21-9, 昭和25年
- 斎藤美州(1955) 『英語教育』, 岩崎書店, 昭和30年。
- 田中寛一(1958) 「わが国における教育測定の発達」, 波多野完治他(監) 『現代心理学大系』第9巻, 測定・評価(理論編), 中山書店, pp. 313-33, 昭和33年

永原敏夫(1932) 「語学力検定法に関する諸問題とその考察」, 『英語英文学論叢』 第1巻,
第2号, pp. 328 - 52, 広島文理科大学, 昭和7年

(1936) 『試験と学修』, 英語教育叢書, 研究社, 昭和11年

西谷太津雄(1962) 「英語教育における客観テストの限界」, 『英語教育』, 開隆堂, Vol. 13,
No 8, pp. 15 - 31, 昭和37年

松岡藤太郎(1932) 「英語教授と入学試験問題」 『英語英文学論叢』, 第1巻, 第2号
pp. 314 - 27, 広島文理科大学, 昭和7年

渡辺春吉(1950) 「テストについて」 *BL* 209 - 5, pp. 30 - 32, 昭和23年

(※ *BL* 128 - 11 = 英語教授研究所発行 *The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching*
128号, 12月号)